

安政七年庚申日記

大槻清崇時年六十

正卯起鹽嗽畢着礼服拜祠堂而後喫雜烹餅之上郎
公梳髮一拜辰後第三廳賀正當中正廳賜杯此式已畢
便室賀礼畢然後退得一絕

大槻文庫

新進位階增土疆羣臣悅服萬人慶今朝玉璫黃
流酒轉覺恩波一段長

丙戌又得一絕

兒過成童翁六旬雖然室陋亦蓬春青杉當屋梅花
白中有羞顏鶴髮人

二日曉雨天明方晴燈未撤 吾公出冠裳嚴然駕左右衣
素袍陪錄皆着白丁午時歸駕次局諸士皆賀於便室未解

予親點茶賜次局僧醫藥甚日未哺便歸
三日晴寒甚高中上殿諸醫員賀正畢告午飯而送遂不復出
緣山賀正了後微定二寮小飲歸路賀都筑氏歸則永井氏來賀在
堂對酌正月初更

元旦早を減るころく 柳詠

元夕のころ女多し
元夕のころ女多し
元夕のころ女多し

四日晴烈凡寒甚終日在宅元湏為仙小聖古坪并右田美
賀設酒是日作帳弄歌 別錄

五日晴寒減昨日但凡稍殺作送木村橋新宿賀堂不堂

錢木村以糶二十袋醜鯉二隻 住吉人

六日晴午後抄奉亮御車賀午後歷賀近降至下谷
小飲於小橋氏御車賀 誦降四七而雨

七日禺中上郎式畢 往林氏 午飯於土元氏字田川興秋并井上中
木卯贈余以劍南詩鈔 玉川崎氏而臨夜飲於木卯軍禮奉行
及五色紙數枚

八日晴甚雪城枕山教堂九尋者子泛舟游墨水舍舟而上訪新
梅莊已有一樹全同尋甚若掛詩一首去還舟投有明樓對酌醺

然夜更徹與而歸是日不甚寒賀壽詩酒之興得絕句三首 別錄
九日晴翻面堂開講松本大學德公章畢午飯戶津氏往東禪

寺度暮賀山主阿英身仕役傳吉為人刺殺阿者快之夜赴水

師從督木君告別會夜二更歸

十日晴續德太郎來自佐倉傳平野維之論文之助米利堅之行斷
不可許但幸之折閱謝之餐翁余惜其失措其志之何乃先往
濱苑過六柳老人言之兼議替人余欲以伊孫律克之晚又往則
撰州既在井某代之議乃決遂留而飲

十一日謹曲初講畢出生拜賀歸家午飯又之上邸訪赤松純贈確堂

老公書子門公因尚云云之語純喜甚余又示今將軍書此拜觀之余因謂

獻之公如何絕諾而置之歸後又往木邸氏致文所受三十金用

人島某受之取謹書乃與撰州對酌叙別

今飲三杯酒明朝萬里行黯然而淚下不獨別離
亦是憂國之情

此君別只箇二十字皆矣勿復言
但秋凡歸期速耳

十三日晴是日追儻余以午後赴森仲助會高妙街
萬千言曠時與熊澤生

同歸走上邸則儻期已迫湏更福內鬼外之當微殿上畢乃歸

十三日終日在宅中地芝海未贊設酒贈以確堂公書贈半土兒一枚是夜

錄旧稿二更就寢是日木攝州發品洋至橫濱不知以明朝開帆否

十四日陰六終日在宅是日木山君發我日本赴米利堅國大海萬里唯

無恙望望浮海出苦海

十五日晴吾公登城早起趨邸駕出乃退午後云高柳清亭不在遂于

子男三而歸應與對九女積以田三氏歸路問園研病差收坐落置忘

使接接飲孫君用其來會初更歸

十六日雨終日在宅午後永井氏老妻携本才二家掃菜供炙饌皆歸安獨宿

十七日晨晴甚午後掘田房擇善堂開溝白鹿洞揭示畢

且法脯時情作書盡收悔是夜烈凡寒甚川崎道氏以明日

十八日凡稍殺日亦出是日草堂發會唯祈凡止氣暖耳

是日會者三十五人夜二更散賀金五圓

十九日快晴馬中上郎公調馬特命拜觀畢游園中賜梅花一枝

作待又有點心之賜遂講詩於座廳巷伯退午飯於宅脯時誣川勝君

會俗客難留余向來田法眼避退之計遂携小樽生南華生飲於黃

茶亭聘伎二人其一人面甚似河田貴之助夜過二更乃歸小橋生來

宿

二十日嫩陰晨起典少橋生對酌因花治來訪侑巨觥四五杯橋生

先歸為治去時已停午矣夜赴香雪舍勿辭去

二十日陰午後竟雪徹定來往小酌過午而歸此時雪未下

是日平地二寸至晚而止

二十二日近春氏開講夜止元生來飲

二十三日正緣山訪徹定於江戶崎大會寺寓品坐對酌午時辭去又訪從

午級歸路飲中郎橋本氏初更歸

二十四日晴甚日大君詣緣山

二十五日晴相响至遠田氏產喜多村醫伯日跌赴秋保清潔招飲

會者守屋務本成田大孝及余也

二十六日雨終日在宅

二十七日會雪城氏詩不取夜命駕而歸 是夜歸山火

二十八日命駕至乃田先而往其夕過陪飲便室夜二更歸 三言之外駕發一方

二十九日侍講延引飲于小川中地二氏遂至緣山寺內詰於徹室而歸

海日

二月朔園見彦三子金次郎五百尺入門川越百尺初男六入門大工二兩作乞書幟

二日陰早晨遠田澄庵來漢通鐙武宗紀俱飯寓中堀田彦駕至

乃往溝生亭下篇首章畢飲擇善堂日昃歸途中雨甚是日

大君始游濱園夜作耐軒詩稿跋

三日快晴春意全動



閏三月六日香港刊行新聞紙

萬定產中

茲聞在日本國京城有十七人行刺英國國王查此
十七人乃係日本美利公之子之徒以此美督公子
不願外人在日本貿易因上年日本國王意欲
國立和約准各國船隻日本各港貿易是以刺
公子有謀反之意買人謀刺國王幸得英國王
護身兵勇保駕救脫國王只被打傷而已日本
京城統督照會各外國公使大臣各宜謹慎防
虞

此則之現也
國王幸作

被打傷也
亦得命之誤

傳聞之誤也
國主當作老

被打傷而已
亦傳聞之誤

國主

閏三月六日香港刊行新聞紙

萬延庚申

茲聞在日本國京城有十七人行刺其國主查此
十七人乃係日本美督公子之從人此美督公子
不願外國人在日本貿易因上年日本國主與外
國立和約准各國船進日本各港貿易是以美督
公子有謀反之意買人謀刺國主幸得其國主
護身兵勇保駕救脫國主只被打傷而已日本
京城總督照會各外國公使大臣各宜謹慎防
虞

六月朔清暑：規升至九十度。是以森井生為塾長

以董學政。○鴻所使來。送金蘭軸等。○因情守詎訪疾為

祭改車馬盈門。○橋梅所令春有寶刀及切飾三具之賜。是

日。開宴招同僚及余。賀以鯉魚一匣。作一絕附之。考啓往初更傳

奉公幕府多年勞。須信行人功最高。報國丹心知

益固。君恩新賜護身刀。○大工常吉來。付以一圓一方

二日陰。至則甚。出不過八。八度。堀田。產駕。迎講。告子下。為三。卒

歸別岸浪。逆捕來。午前。辰。漸。分。平。來。北。洋。皇。七。及。平。歸。晚間一雨頗快。是日甲子

催合金二兩一方。衣。桂。插。堂。區。馬。草。三。枝。

三日陰。後晴。馬中。玉芝。卸。候。暑中。起居於大內。參政。局。歸。路。訪

岳家及遠田子歸熱甚但有凡未楷堂招飲黃昏已見贈
洋製黑深絹一枚六柳翁健云杜家昆弟及邢堂亦來万况即携
亞製縫衣器來極其奇巧衣四更歸

四日朝臨山崎文古書東云佐貫侯以去月廿七日歸都贈著履一包此元
生不贈自然生山内教馬來是日賜精十袋 乾飽六十箇日晌上芝郎訪大内大夫茂貫

監察田邊又歷訪三行人於中郎而歸 三體詩絕句解製本成

五日大暑如昨晡時共南華赴漢苑監招飲食炙鰻劇談至三更而內
是日以崎道鳴持三島一洲卦詞擇集示

六日晴午後往山内氏觀藏幅大抵九品但玉堂蘭山水雖非莫
筆可觀玉中立水里玉花卉可謂絕奇太原人萬曆晚雨疎雨

七日晴風乘晨涼赴八洲納新刻絕句解於學問所獻一本於祭酒

匠鉄函心史二冊遂候阿部有馬二侯而歸朝飯于元氏日映携茶并生

赴守屋氏詩會者古内參政左近茂貫監察小川草迄及同生也

八日朝雨贈饅頭於諸家祈亡妻貞節冥福也所謂三回忌饅頭三百奉箇

價二方朱陸是日終日在宅

九日晴微涼以昨夜有雨也山妻登樓使人終日夕背見善庵補時歷

候近隣而後候用防疾不過雨微云乃歸稍歇夜誌唐澤氏話

不在中石川櫻所來贈寒雪紙一卷

十日陰午後出至係山微定茶雨暮了花常福者富名而玉本房

候大僧正共坐我十話而歸來又大兩

Crasticea gom.

十一日晴朝飯後歷候是湖南溪父禮塘井有井飲于園
氏而居湖父更進之藥地海之也已知井山亭即此
也海子之也三而入也新寺訪生克上人物後也戶積木
村即老保南亭樓乃高木管工草共五人共四人到海岸
小飲於茶三樹而歸

十二日晚雨晴多感宿減

十三日雨

Crastula gom

Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page.

Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page.

近所望地(北)下(南)之(東)也

三好河内 栗田修庵 根布通海

岩瀬野所 信川三宅 山内教高

以和八中 結澤周統 志本南信

桂川甫周 遠田隆盛 織田文徳

以和八中 以和八中 堀井香飛

木村市左 近江近江 高井之益

長久保中 以和八中 廣瀬父平

真光寺 小波浦全 山崎好次

清室也也 以和八中 戸塚越馬

名已考也

山本宗伯 川崎三宅 古本也

杉井小三郎 唐澤美盛 吉田三宅

熊澤三郎 栗田三宅 中津三宅

古工 津田也也 以和八中

高橋三宅 石川梅所 大子也

永井三宅 羽倉外也 大子也

江川右也 以和八中 出生也

杉本也也 古橋三宅 以和八中

以和八中 差也也 杉田三宅

木村梅所 伊藤三宅 以和八中

以和八中 以和八中 以和八中

愛高部作
深川八幡
川邊三宅
古工也也
以和八中
以和八中

御本坊
生我代

杉本園池邊

古坊由字
山内通名

徽定

御本坊
生我代

川邊左邊

三月の中

中村製

浦本雪洞

少橋多助

中崎玄順

今川彌重

三井保介

高橋十左

井上仲

井上重

宇田興高

杉内任吉

脇坂中務

杉本園池邊

林古子

御本坊

御本坊

御本坊

御本坊

御本坊

御本坊

海之宿

駒井符丈

宇作秋坪

右馬兵衛

唐橋

阿都因幡

山崎

三枝

編

竹田

堀田

中村

北井

林武部

振張

皇國を世界第一等の強國とする
御偉業をいふは上

天朝

宸襟をなす安下ニ萬民を安堵為政度
思召よと何と厚くも心を無法政事
向ふ要華
之助未若又いふ事と云ふ事
聊に御偉業を
國家為第一と云ふは
又いふ事と云ふ事
御偉業をいふは上
可也抽忠諫也

右 入御以後於了皇書院以下
中給大輔中在
者中列生 御偉業

近年の由

御上治の由と云ふ 皇書院法
治字をいふは上

御上治の由と云ふ 皇書院法
治字をいふは上

上意をいふ

六月廿日

甲斐も紀播磨も... 甲斐の書中におもむくことの
口述少ありて院承知。おより切齒おふ世思ひぬれ。
高紀院と何しお高。守符を加へん。位階を...
とて復備。任を以て得替せし人との事。此方
ふと院。その儀。何れ。何れ。奉書のこと。
慶長... 公使... 此都下... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の

... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の
... 我政府の

御垣守御左衛門 三右衛門
水舟如承古
板倉周防古

横濱台文通二

五月廿六日夜我五月 亞船長如洋を去りて、同夜の
 幸旗を達するが船の船由船は此年ケル 男男は煙囪 煙囪煙囪 あり、しり 旗は
 砲者亞船の綱梯を打切りたり、此れは亞船の七砲一発
 せり、蒸氣を強めて去り、不幸に沈没の患し、しり 海軍
 一

同六月朔日長如洋に亞、軍艦を被通、船は長如洋
 亞船の七砲一発又二砲者、被通、船は破裂し、水が死に
 一砲者、蒸氣を強めて去り、不幸に沈没の患し、しり 海軍
 一

横濱台文通二
 五月廿六日、船長如洋を去りて、同夜の
 幸旗を達するが船の船由船は此年ケル 男男は煙囪 煙囪煙囪 あり、しり 旗は
 砲者亞船の綱梯を打切りたり、此れは亞船の七砲一発
 せり、蒸氣を強めて去り、不幸に沈没の患し、しり 海軍
 一

五月廿六日、船長如洋を去りて、同夜の
 幸旗を達するが船の船由船は此年ケル 男男は煙囪 煙囪煙囪 あり、しり 旗は
 砲者亞船の綱梯を打切りたり、此れは亞船の七砲一発
 せり、蒸氣を強めて去り、不幸に沈没の患し、しり 海軍
 一

吉船の悟道寺船 及び四ヶ所にて砲臺を一時に放棄凡三百餘
若し四十九者、七の多事船、四人中死三人、船員
多事船、大砲九十歩、内二歩、船、大形、破、碎、仕
り、船、の、船、程、と、破、換、と、し、只、砲、臺、の、大、破、又、中、間、市
に、打、込、り、の、船、は、殺、傷、難、美、由、を、由、を、人、七、名、を、打、込、り、
銃、丸、を、獲、得、す、り、大、凡、三、十、五、ト、位、を、得、り、由、多、事、人、十、名、を、長、お
の大砲、を、大、事、り、し、り、又、多、事、人、云、に、長、お、を、
法、言、に、之、を、船、程、と、し、り、何、れ、は、多、事、人、情、に、政、府、を、命
を、交、我、軍、の、陣、儀、を、決、り、存、す、り、也、
廿六日夜、西軍商船を被入は、
新島、の、船、は、
新島、の、船、は、

廿八日、重火砲、被長、法、お、出、内、海、を、棄、行、り、
カ、リ、是、に、我、軍、流、人、彦、孫、采、徳、徳、成、長、お、事、情、を、因、り、
戦、多、り、船、由、中、也、

廿九日、夜、佛、大、軍、艦、入、は、兵、卒、千、人、上、陸、被、
有、り、往、來、速、く、佛、人、の、如、く、お、之、に、被、事、を、以、て、ド、ラ
を、以、て、之、の、乱、の、人、を、集、り、隊、を、整、一、て、調、練、の、如、く、
被、好、し、り、の、故、を、以、て、被、好、し、り、の、故、を、以、て、
其、多、事、大、軍、艦、の、砲、門、五、十、八、を、通、り、し、り、
此、夜、に、多、事、英、人、齒、を、く、り、三、五、の、女、子、を、被、
角、ク、ド、キ、け、り、也、被、事、を、以、て、佛、軍、の、兵、端、を、削、り、し、り、

去五廿界に對し西目と英と如何なる事

英軍艦船を被り支那上海の山砲を以兵庫開港

に後判次、薩州に生麦一件に後判次、同島より出帆する

五月十日

去十日夜長、おる亞和を艦砲を海に沈没せる者艦出

帆に佛國商大船の由下、英通船を本島揚子赤

懐百大船を被り大佛船に砲丸を著り少くは損

りし佛船の陸及山砲を砲丸を著り此の艦に

沈没したる由に佛船を被り艦を以て一長

崎にお開、此島高港に任進するに因り戦争を計る

とけ此れは甚く不便なけし、支那上海に急報を以
先けるなりと云い

江戸は海を去る之を令り又通るに 六月十日

一長州戦争一条既、い多知、い多知、い多知、い多知

長州軍艦三艘を待令、い多知、い多知、い多知、い多知

通行の事、い多知、い多知、い多知、い多知、い多知

砲丸を放り、い多知、い多知、い多知、い多知、い多知

砲丸を放り、い多知、い多知、い多知、い多知、い多知

砲丸を放り、い多知、い多知、い多知、い多知、い多知

砲丸を放り、い多知、い多知、い多知、い多知、い多知

一日

同上之某徑

狀園伊之助

一日

大什長

平田九平中

深子及五果 古亦言猶之自免殺死

一為海兵出陣後居而為純如即死

柳士 前田重太郎

情儀重原中

井上之八

川保重太郎

菅原重太郎

桂清信重中

柳士 有田重太郎

一於紀伊山寺猶存子

柳士 菅原重太郎

一於長島場即死

一為海兵出陣後居而為純如即死

一七日於相模之樂

菅原重太郎

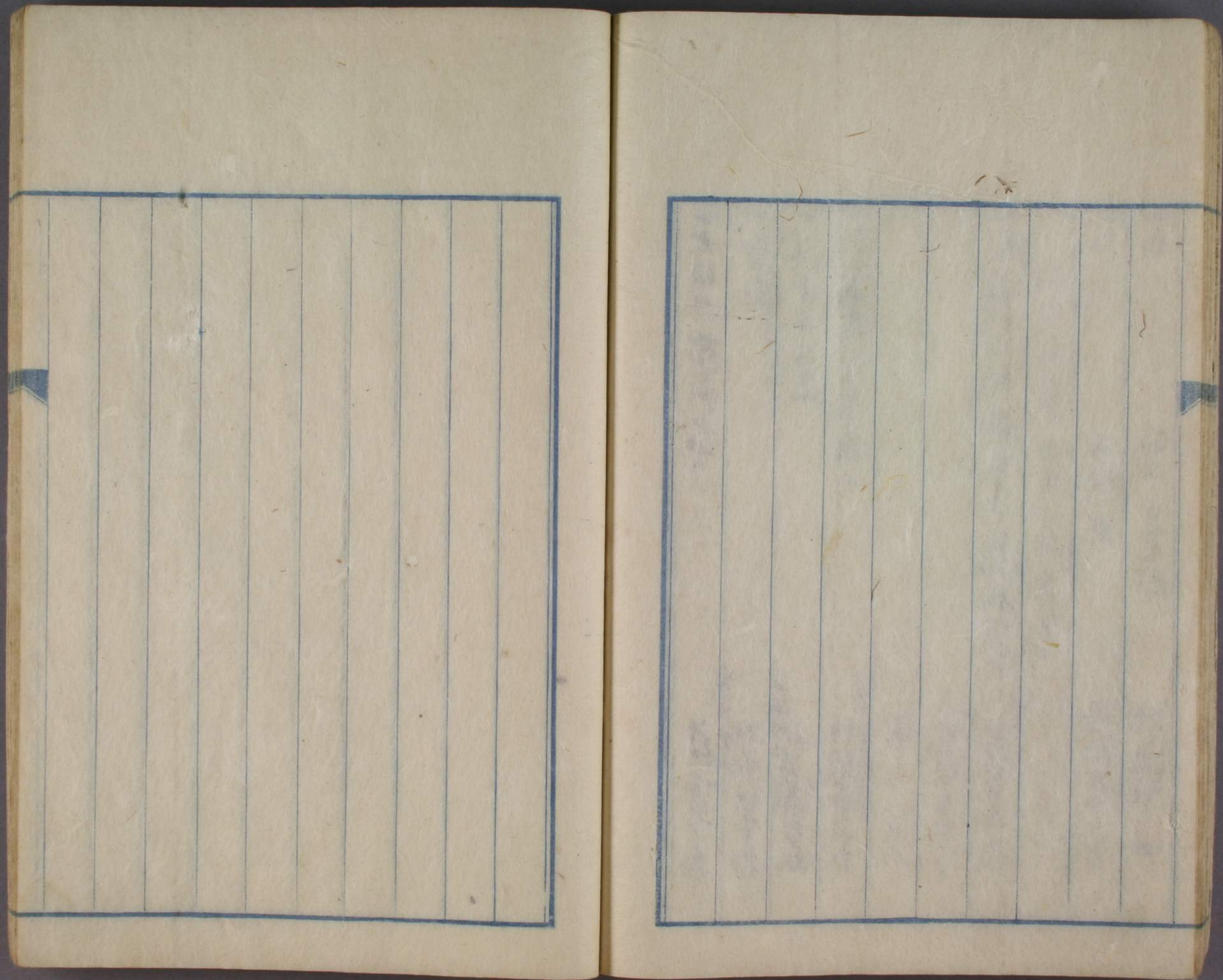
一即死

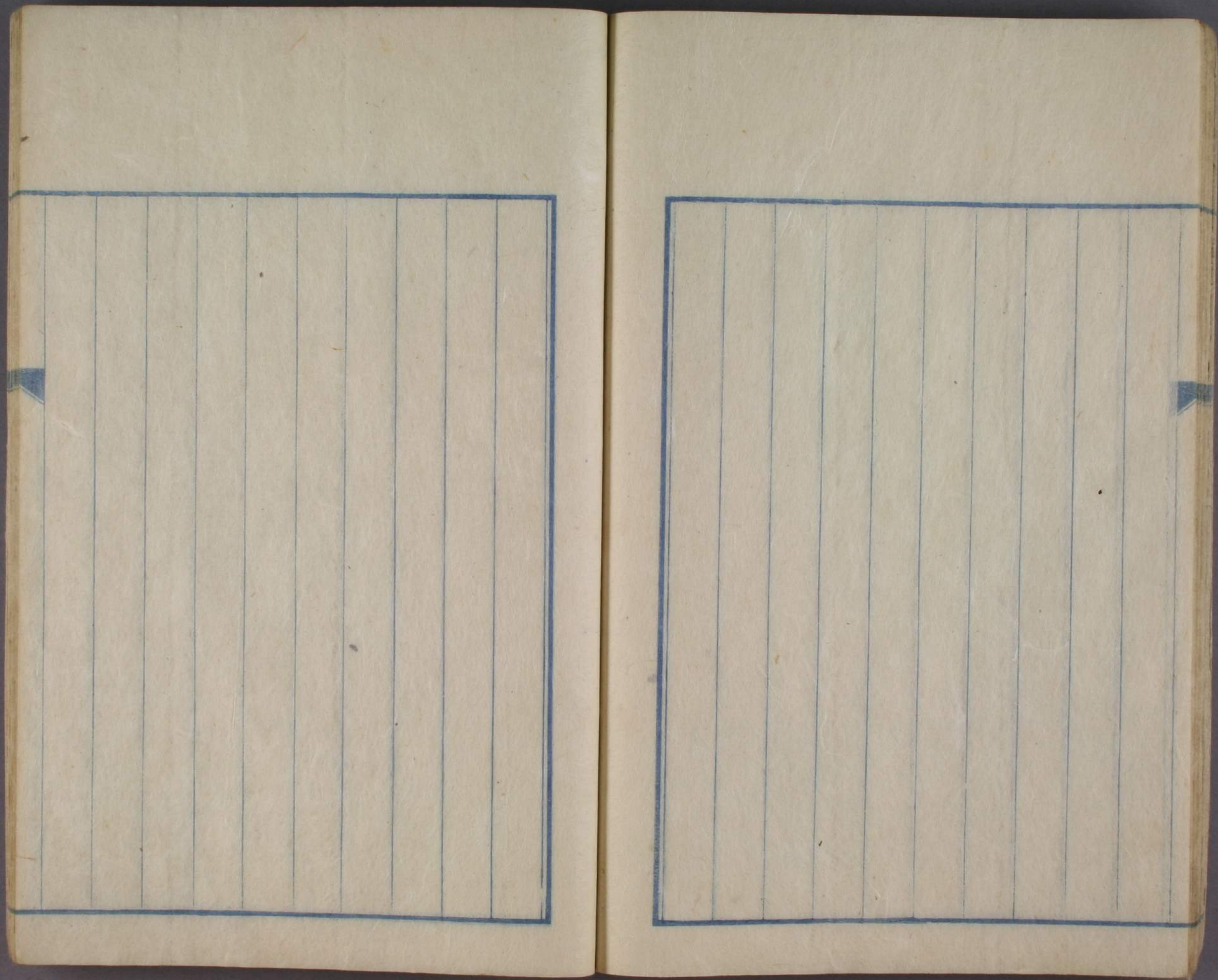
山下重太郎

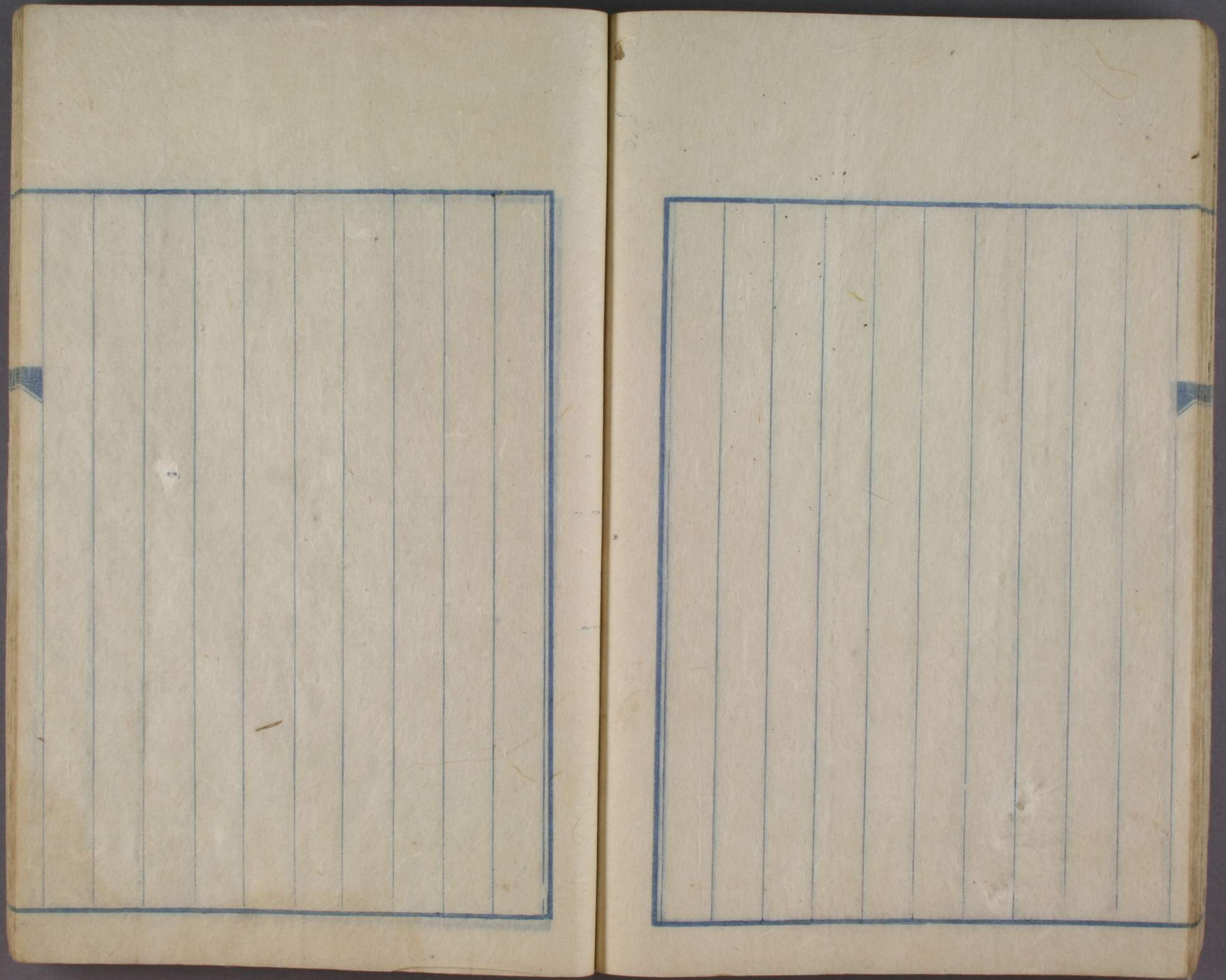
一深子及五果

柳士 菅原重太郎

以上







Handwritten text in a blue-lined notebook, oriented vertically. The text is extremely faint and illegible, appearing as ghosting or bleed-through from the reverse side of the page. It is contained within a blue rectangular border.

A blank page from a blue-lined notebook, oriented vertically. The page is empty of any text or markings, showing only the horizontal blue lines and a small blue tab on the right edge. It is contained within a blue rectangular border.

冲並書以

近來不察易形勢存 將軍家以政事向以豪華
海吉之依波 伯也且進之身事務少之湊以
公武之情實通微也其至以爲之且之存也
由上湯之合體之融昇之由内也信之如之若也
系於者上極 初使系向之由彼是之不察易以將統
存之由之流何終之由廣也也 世之入之能引之
當象之至之由中及中者之由中而通
貞山探核之由之熱切之由之本之爲之
冲並書以之由之非也之由之也

京師及江戸之忠義之由臨國也之由之
由中流之由御也之由之由之由之由之由之
以象以右之由起也厚也之由之由之由之由之
之由之由之由文武一也之由之由之由之由之
之由之由之由之由國家之由之由之由之由之
之由之由之由之由之由之由之由之由之由之

六月廿四

今被

公方標市上流し 西内意云

仰せ有るは先例に道

清山部も供奉を由安方の所置に在る事申上り申上り候
向ふ船通し折柄に候

宣銅成未忠勅不付止申候に道多由所候に道申上り候
美大と申入申上り候事一は官取に申上り候事一は官取
に申上り候事一は官取に申上り候事一は官取に申上り候事

上は信約向ふ勿論也之に信備は未成候事法方は信約向ふ
候不仕不付事に由是先年分は信備向ふ事候事候事候事候事

下は信約向ふ勿論也之に申上り候事一は官取に申上り候事

向ふ事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

向ふ事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

向ふ事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

向ふ事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

向ふ事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

亥、三月十五

存形様云云京都一安否日記

御幸河内海流古地 以住奉命所一以是長明寺時之能

持子 進御時 以出 中對面太 赤履多 以衣冠以

台替以海以年 四 以殿上為海以好

龍乳

天蓋以游 以形其形以道云以事 以安否日記

以圓初夜九寸小寺安以留彼諸事無以備以海流

以道中長以法身中寺以依 以法是武以代江戸為馬上

以新安勤寺法不使五片金幣但木以依以寺越以悦寺

以以法身寺以法身寺以道中寺以

九月約日方

仙臺川大橋の上 羽長瀬の梁場下と岩村

九月中と毎月三日八日 八月八日 九月八日 十九日廿三日巻綱

寺經廣綱一及 法地以寺下以事

ちをとり 山ノ木ノ枝を折りけりたれ
きりしとせむをいふ標折の事又は木ノ枝を

新古今集西の法師

いし北山まごの志をう乃乃とて

まごとぬつとれ子を尋ねん

説文築本作築様儀也書高貴山築木

徐鉉曰木儀謂陸所行井中祈其枝為道祀也

○よあつりひ

契沖師のいそく後成仰の歌に

身のものにさうゆ衆のちの名をみよあわをめで

こをふくむるもれ

百葉集もあはれと為遠と於これをは(か)の歌

事好しゆて以為と比古と更ふかをハまに

後世ハいふ(ふ)かをれり

今按遠と濫とくよハくすゆ事たるを

そり利とりあふなりなる事れまのやうに

中比乃先達ふゆ味なりゆゑに後名つひ

こゑれてはけを好くなれり口聲紙日記も

ぬ人の待成伝きるるたうは外中古の歌ふ

かへりれふゆ味あまのこことり

年山紀開卷五
十四丁

元徳
作借

乾隆丁卯冬月晴湖日學弟孫陳典拜撰

訥校舊客金由書

南抄日學弟彭元璋拜跋

前京馬才楊女諧好書

彭印
元璋
朴

乾隆己巳秋初日同學華業世度拜手題

江外史金典書

佃次郎萬十成を如居赤明の左の先手の士を將し唐島に於
て軍士十成敵船を乗移す時敵劍を口中一定とれり外
以るより程ありて身を持て胃此を強く打れ海を去る
へこれと水の長くとれに神きあふるを怪者徳を是を傳
せ難力を指しおふむお敵船に乗入て船中の者をも持切
りてりりり嘉明船あまに乘移れり其のこ
関ヶ原の時赤原に伊豫の松前を去り關原に打向れり十成
が堅固の守り不却して松前より多きなり毛利輝元の兵
村上掃部徳島内匠を根兵居穴戸を去りお松前を去り
と支度片能多村六河津北一旅をのち招きよる人從

ちん平世を治すに若くは御尋に三千餘を擧て
州を向以使す以てとく城を以てしれよとて福漢
きんと松前一云りり城代如存内記但し我備先敵
なだばくぶしとし子細なく城を以てしれよとて
をかくるる方を待れとて逆をたて有る人海りて
三津浦より民家ありて待るる

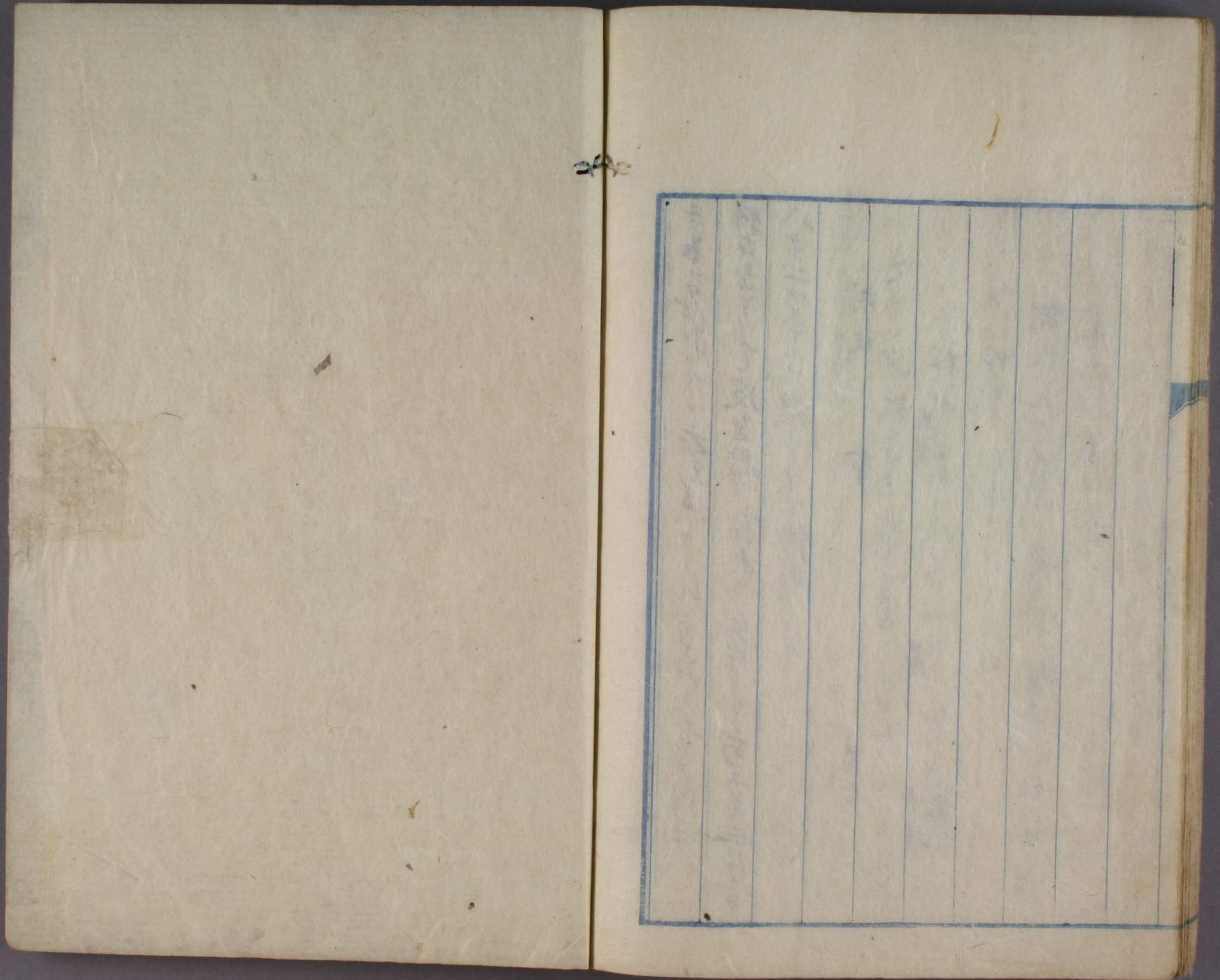
古圖の城ふ存者高橋有る如勢をさし向れり
松前城の中の人々悦びあがり十年相討はせし今敵大軍
少く押寄せりしとて謀を設け一戦して敵を奪ひて
若くは其の法し城を枕ふして討死すし一勝利をいひ生

前の面目にこれ結構なり人の救ひふりて運を閉じり
とて此人予口惜るしとて禮義を云くして辞れり
此時市中一控者三津浦に海者を返るゆを十威を
双方の勝負を定めて見合をなす里田大溝永田村の首地
小まうし若くは人守る也妻子を留め金銀を盡し
いふくの逆者をもちて三津浦にせし高野原平松おき
解し仕立をうけしる姓を困りて河野一族此人を困りし
る姓はあ堵と悦祝以て城の中より若くは具家
りし高野原平松一出陣軍兵を拂て返りし今御止
る若くは多うしんたうく若くは病者一人に軍兵を若

ち一佃十成した福に鉛薬を乞く後支度の外更ふむ
と如逝去ち人々口々云々せしむる如藤原の士大将とあり
一として強むとありなり

彼方姓一人立帰して其の経を告知せられし事い今夜風雨
の始れよ一夜待たしむる如藤原の貯一とせしむる白布を胴
肩衣ふ裁縫て解あふ十成の目小松の字を多て
書しありし一今夜を定め首をとりし其の首を多
い勝負を止めて引かれ約束をいぬ慶長五年五月十六
戌の刻にお立ちり忍の若帰して今夜を村上陣に集
りて返答の事い響山の濱の色は張着の是に松前此

押の事ありし事い十成打破して道へん安んれし陰中
小備りし三津浦へけしむる謀法はふむとありし道に
江戸山を越えて子の刻をりし三津浦の如き所との家
小火をうけて切ていふ大い事をして物音も少くし十
成薙刀を提ぎ先小進みれし掃部敵あきりし何
秘の事ありし事いけしむる夜付の大將佃次を傷し
し事い掃部をけしむる伝敵あきし切しし貝を吹きて
軍兵を多しし事いけしむる掃部を始め内匠兵厚し
けしむる引し事い久米の御如き事い多しし事い
翌十九の十日又町あきれし事い支一し松道は山



の壬戌

今度

大目録

の公私裨

今度

の壬戌

破洋

石路の刻

夏刻の字

老美

ひわや

の壬戌

石路

製造

家水

牛柄

の戌

閏三月

庚午

の戌

お政

申三月

十六年

廿九

